

書 評

パーソナリティ (人格・性格) の心理学

大 久 保 康 彦*

Yasuhiko OHKUBO

筆者にあたえられた課題が、「人格 (又は性格) 心理学」の書評を、ということであった。これまで、性格心理学や人格心理学という領域が、自分の専門分野の中核をなしていることは改めて問われるまでもないことと、さしてとまどいも感じずに、日常、教育や臨床の仕事に携わってきたつもりである。だが、図らずも、このような課題を「応用心理学研究」の編集責任者から依頼を受け、さてと考えると、にわかに課題の大きさと責任の重さを思わずにはいられない。浅学の身を以って、多くの先達が繰りひろげてきた心理学のこの壮大なテーマについての書評などとは誠におこがましい限りと尻込みしたい気持ちで一杯である。

しかし、お引き受けした以上は、なんとかその責を曲りなりにも果さねばと日頃不勉強な筆者もパーソナリティに関する最近の良書をたずねて書店を歩いてみた。その挙句明らかになったことといえば、そのものずばりのタイトルで書かれた書 (つまりパーソナリティに局限したもの) は意外に少なく、これに代って、いわゆる臨床や教育に関わる書の中でとりあつかわれるスペースが増えてきたこと、そしてなによりも初心者向けのハンディな読みやすい心理学書の形でおびたしく登場してきたこと (この中には、いわゆる実用書の類が多いのも事実) 等々である。

さて、こういうことで、近頃の傾向のひとつであるともいえるが、パーソナリティの問題を人間観のちがいによる諸立場から、人間性探求の面から、また生物科学的実験的な裏づけや、あるいは社会文化的な文脈の所産から、さらには臨床や教育の実際をふまえてその経験の統合からといったように、多様なアプローチによって展開していこうとする方向性が認められる。

このたび、ここにとりあげた書の中でも述べられているように、一体この「包括的な概念」をなんと呼んだら

いいのか、パーソナリティ、性格、人格、人間性、そのいずれにも一長一短があつていまだに決めかねている始末である。やはり、このテーマにふさわしいことばは今後もあらわれることがないのであろうか。まことに深遠にして宏大な領域であるといわねばなるまい。

かつて、佐藤幸治著「人格心理学」心理学全書 第11巻 (創元社 1951年本文390頁)、大西憲明・高木正孝・長島貞夫・井村恒郎・乾孝・本明寛著「性格の心理」現代の心理学 4 (金子書房 1952年 本文269頁)をわが学生時代の座右の書として、折にふれひもといていた頃を思い起こすと隔世の感を抱かざるを得ない。

河合隼雄、一谷 亶、星野 命、藤永保、鎌 幹 一郎、水島 恵一、土沼雅方著「性格の科学」講座 現代の心理学 第6巻 (小学館 1984年 404頁)

本書は、その序文にもみられる通り、「性格心理学の現状よりは、あるべき姿、またはその生産性をつきつめてみたかった」とする意図によって貫かれているように、各執筆者それぞれの立場からの意欲的な「性格」へのとり組みが感じられる。

前置きとして、やはりその序文で、「性格心理学のなしとげた成果がいま一つ歯切れの良くないという印象を与える理由は、いろいろあげられよう。たとえば、その本格的究が始まってから僅々7、80年にすぎず、飛躍的成果を早急に期待されても無理だということもあろう。」といている。これに対して、「問題は、むしろ、一般の人々が性格研究に寄せる期待の大きさやあり方が、現代心理学のようやく辿りついた地点と、くいちがいがすぎているところにあるようにも思われる。」として素直に、性格心理学の現状を説明している。一方、実験心理学系の研究者に対しても、「性格研究は、そもそも数量的・統計的ないわゆる科学的手法とはなじまないところもある。」と述べており、そこにいくばくかの隔りのあるこ

* 国学院大学栃木短期大学

Kokugakuin University Tochigi Junior College

とを指摘している。

しかしながら、本書の姿勢としては、「性格心理学がより普遍性を獲得するためには、どの人々をも公平に理解しようとする偏りのない視点が必要」なのであり、そのための一つの足がかりを提供しようとしているところがその内容からもうかがえる。したがって、「通常のテキストブックにみられる特性論や類型論、性格検査法、力動的心理学の基本原則などの記述が」おのずと省かれている。

本書の構成は、第1章 性格とは何か、I なぜ性格を考えるか、II 性格とは何か、III 性格研究の立場と人間観、第2章 心を動かすもの、I 歴史的背景、II モチベーションとその理論、III 生物学的動機、IV 感覚探求の動機—内発的・認知的動機、V 社会的動機—達成動機を中心に—VI 自己概念と動機づけ、第3章 文化とパーソナリティ、I 性格の非個性的側面とその決定要因、II 「文化」と「パーソナリティ」との関連、III 「文化」の新しい概念と研究の方法、第4章 思想と人格、I 序、II 意見と適応、III 権威主義的人格、IV 認知体制と人格、第5章 個人・社会・歴史・序・本論のねらい、I 自我同一性とライフ・サイクル、II エリクソンの同一性の確立、III 歴史過程における個人と社会、第6章 心の治療序、I 心の病とは、II 治療過程と方法、III 治療関係、IV 心理療法の人間学的課題である。

たしかに、これらを通覧してみたかぎりにおいては、従来の性格心理学書にはあまり登場してこなかった内容、たとえば「心を動かすもの」、「文化の新しい概念」、「意見と適応」、「権威主義的人格」、「認知体制と人格」、「歴史過程における個人と社会」、そして「心理療法の人間学的課題」などが目を惹く。

第1章においては、「性格心理学の歴史は、『心理学』という学問が背負わねばならぬ十字架について、非常に端的に示してくれるところがある。」として、心理学への一般の素朴な期待が、この「性格心理学」にあるにもかかわらず、「大学内のアカデミックな心理学者からは、その方法論に対する不備、科学性の欠如が指摘され」ている点をあげて「性格心理学が内包している矛盾・葛藤は、現在においては、相当に解決されてきているものの、やはり根源的な問題として残されてきている」ことを強調している。

そして、性格を考える場合、つねに研究者の人間観やその置かれた状況が問題であり、ホールとリンゼイの「パーソナリティの理論」(第3版)から、「人格論の次元比較の表」を載せてこれをわかり易く紹介している。

第2章は、パーソナリティの根底にあって、これを動

かすもの、すなわちモチベーションに関しての詳述がおこなわれている。モチベーションの理論、生物学的、社会的な動機のいろいろ、そして最後に、自己概念と動機づけに関して、カウンセリング過程における自己と理想自己との関係からそのずれと適応の問題に論を進めている。本書の中で、この第2章が、122頁で全体の3割強をも占めており、図や表を駆使しての丁寧な紹介が繰り返りひろげられているのが何よりも際立った。

第3章は、文化とパーソナリティとの関連が、大きくとり上げられる。両者の相互のつながりから、「モータル・パーソナリティ」のありようと問題点を論じ、「ステレオ・タイプが、その国民の行動に一つの中心化傾向をうながす場合、客観的事実と一致することもないではない。」と述べ、かつ「しかし国民は、どの国にあっても複合体であり、地域、階層、職業、役割などの要因により、複数の分節的モータル・パーソナリティを含んでいるので、単純な結論へと導くことに慎重でなければならない。」とも結んでいる。ついで、「文化」概念の問い直しから、「主体文化」(subjective culture)の問題や「心理・文化的過程」(psychocultural process)にもとづく「人間それ自体」の生き方を通して、「一過性ではない、堂々たる(これが比喩)姿をもった『文化とパーソナリティ』でなければならない」論を展開している。

第4章思想と人格でとりあげられている問題のひとつは、意見と適応である。ここでは、フロイトの生涯とこれの思想との深いかかわりが述べられている。フロイト自身、意見や思想が必ずしも論理的なもののばかりでなく「非合理的な側面を大いに含んでいる」として、「意見や態度が葛藤の妥協の所産である」とみている。この点本章の執筆者は、これを飽き足らなく思い、「真の思考—価値や意見の形成は、葛藤の克服の成果である」とみたいというように積極的な見解をしめしている。ここでは、「非合理的な思想(むしろ、マス・イデオロギー)の典型として、さまざまな偏見、特に人種偏見を挙げ、反ユダヤ主義の偏見への対極として、自らの精神分析学を樹立した—「精神分析学が非合理的なイデオロギーを合理的に解明しようとする普遍的用具として、偏見克服の有力な理論的装備となる。」—経緯が詳細に語られている。

これに続いて、権威主義的人格では、人種偏見、反ユダヤ主義偏見(E・フロム)、自民族中心主義などが述べられ、権威主義人格の分析がなされている。そして、認知体制と人格では、認知スタイルにおいて、まず社会思想的な立場からのいくつかの主義と偏見が、社会学的に分析され、精神分析的な考察がおこなわれている。しかし、筆者にとって興味があったのは、「たとえば、くら

やみのなかで光点をみせると、不規則な軌道を描いて浮動するようにみえる（自動運動）がある。ところが、偏見の高い人間では、このような不規則な運動が永続せず、軌道はすぐ安定し以後は型にはまった単純な運動が繰り返えられる。偏見者は、あいまいな（多義的）運動に耐えられないのである。そこで、何か客観的に決められた一定の通路があるかのごとくふるまおうとするのであろう。」という社会的知覚実験の成果である。同様のことは、やはり、かくし絵（埋め込み図形）テストを、偏見者に実施したところ、かれらは多義性に弱く、図形をどれか一つの文脈のもとに固定しなければ安心できない、つまり認識の柔軟性の欠如を証明するくだりであった。

第5章は、これまでのパーソナリティの成書では、あまり大きくとりあげられることの少なかった、社会と時代と個人とのかかわり合いという壮大なテーマが登場する。歴史過程の中での社会と個人とのかかわり合いを、ここでは、エリクソンの学問的形成過程を通して分析している。第1は、自我同一性概念の確立とライフ・サイクル論である。かれの心理・社会的発達分化図式を紹介、自我同一性を中心に据えて、これを理論化し、そこから、後段は、「歴史上の偉人の研究」の中、ルターとガンジーの心理歴史的研究を載せている。それは、かつて、エリクソンが、たどった歴史の上での延長としてかれ自身の生活史と精神分析家としての経験が、これらの業績を生みだしたものだとされている。

第6章心の治療は、現代における、「疎外された自己の回復」と「自己実現」ということを治療目標とした心理療法の紹介である。

心の病と症状の意味については、2つの臨床例をあげて、表面にあらわれた問題行動や悩みを、ただ単に個人の問題にとどめることなく、なんらかの矛盾に対する抗議や自己回復への希求としてとらえ、自己実現への道を模索することの意義を強調する。このあと一般的治療過程と治療関係のあり方の紹介があり、最終節で心理療法の人間学的課題が述べられている。つまり、心理治療とは、「何が治療できるのか、何が変化するのか、そして何が変化しないのか、という重要な問題」につき当る。ただ「治す」ことにのみ目を奪われていると、クライアントには、何の主体的な変化も起らず、ロジャーズのいう、「自己概念と体験との間の矛盾のない一致」や、東洋的心理療法の原理である「あるがままの受容」には至らない。このようなことから、治療の彼岸にある実存的アプローチや自己の存在感、肯定感の構築が基本となることはいうまでもない。そこで、治療者は、クライアントの非論理の世界（ここでは非ユークリッド的現実と

名付けられているが、精神分析のモデルを借りるならば、無意識や原始的な世界、とくに集合無意識の世界に近いものであるという。）に基盤を共有しながら、それに根ざした働きかけをしなければならないと説いている。そして、現実生活において、病者や偏倚者といわれる人々をも包容できるような現実を作り出す社会的課題を負いながら、この「非ユークリッド的」存在性の尊重と「ユークリッド的」限定性との両者の統合を含む課題を治療者は求めつづけることが要求されるというのである。

本書は、以上のような、未来指向的なパーソナリティに関する諸問題を並べてあり、その並々ならぬ意欲と野心とには敬服に価するものがあり、教えられるところ実にあまたであるといわねばならない。

しかし、執筆者がそれぞれ多岐に亘り、その上、先駆的テーマ彩られすぎたせいか、互いの関連性がやや薄く、コレクティブ・ペーパーとしては、いずれも見事な力作揃いであるが、あえて恐れをいわずにいうならば、今少し、全体的な統合性が加わればと惜しまれるところである。

佐治守夫（概説）鈴木龍、肥田野直、飛鳥井望、三好暁光、山中康裕、村上正治、河合隼雄著「岩波講座 精神の科学 2 パーソナリティ」（岩波書店 1984年307頁）

前に紹介した書と同じく、本書も、講座全10巻の2巻目であり、その総論＝基礎編である。この「精神の科学」講座は、全巻、精神科医、心理臨床家、心身科医が担当しており、それだけに、パーソナリティ学を臨床の場を通して直接実践している執筆者ばかりである。したがって、本書は、特に「パーソナリティ」のタイトルがつけられており、本稿にはどうしても登場しなければならない一冊である。

執筆者が、いずれも第一線で活躍する臨床家たちであることは、それが心の病理現象からのアプローチであるとはいえ、やはり、人間性全般に対する豊かな経験と深い理解を持っているそれぞれの専門家であるにちがいない。その蓄積された知識の紹介は、現代のこころの科学を説き明かす上でまたとない絶好の機会である。

本書の構成は、Ⅰ概説、1はじめに、2パーソナリティ研究の四つのテーマ、3パーソナリティの一貫性の問題、4グループにおける新しい対人関係と個人の成長、5健康なパーソナリティ成長の心理学一、6おわりに、Ⅱフロイト・クライン・ユング、1はじめに、2フロイト、3クライン、4コング、5おわりに、Ⅲ人格の

成熟と変化、1はじめに、2『セロひきのゴーシュ』、3サイコセラピーの実践から、4人格の「成熟」について5おわりに、IV人格における特性論、1パーソナリティの個人差、2パーソナリティ特性、3むすび、V病氣と人格一病前性格論を中心として、1はじめに、2古典的の二大性格類型、3分裂病者の病前性格、4躁うつ病者の病前性格、5てんかん者の病前性格、6おわりに、VI人格の病い、1はじめに、2中核性の精神病の例、3パンコフ夫人の辺縁性精神病に対する精神療法、4おわりに、VIIヒューマニスティック・サイコロジー、1ヒューマニスティック・サイコロジーの誕生、2新しい人間観、3ヒューマニスティック・サイコロジーとエンカウンター・グループ運動、4新しい人間の科学をめざして、VIII人格論における対極性、1はじめに、2ユングのタイプ論、3人格論における対極性、4今後の課題である。

I 概説は、執筆者が整理してみたパーソナリティ研究に際しての4つのテーマを意味している。すなわち、(1) 同じような場面、状況におかれると、違う人も同じように行動する。(2) 同じような場面、状況におかれても、違う人は違った行動をする。(3) 同じ人は違った場面、状況でも同じような行動をする。(4) 一人の個人は、それぞれ他者と異なる独自の存在である。これらは、いずれも事実としてあるということ以外に、常に、「何がそうさせるのか」という疑問とその意味の説明が求められているという。これら、(2) (3) (4) から、人間の行動の個人差、一貫性、独自性がとりあげられ、これがパーソナリティを成立せしめている基礎的な条件であると考えられるが、ここでは、この一貫性が問題にされている。つまり「(パーソナリティの) 個人内の一貫性を、個人の現象的世界の認知が変化するならば、当然別の質の一貫性、異なる特性の一貫性として変化しうるのは必ずである。その例証を、個人の独自性の展開という問題としてとりあげてみたのが、エンカウンター・グループにおける個々人の独特な世界の提示及びその交流と、グループの力に援助されて生ずる個人の現象的世界の変化の様相、パーソナリティの変化の問題であった。」と説いている。その具体例として、あるグループにおける個人の言動の変化の様子を詳しく紹介している。そして、これを通して、精神的健康の概念をオルポート（成熟したパーソナリティ）とマズロー（自己実現）によって執筆者は説明しようとしたわけである。

II では、フロイト（精神分析の創始）とユング（分析心理学）という2大学派をとりあげ、かつフロイトから発展して子供の精神分析を創始したクラインを加えてそれぞれの学説の特徴を紹介した上で、三者相互の比較か

ら、基本的な共通点、あるいは方法上の相違点をあげている。このような問題の背後には、「フロイトとユングは互いに相手の立場を理解することが出来なかったし、また、クラインの仕事はフロイトによって無視され続けたのである。」といわれているように、きわめて個人的な感情の対立がそれぞれの考え方やあり方に影響をあたえていたようである。

そこで、執筆者がまとめた基本的な共通点は、1、いずれも「一対一の持続的な治療関係の中で、しかも一定の方法によって獲得されたものである」こと。2、いわゆるパーソナリティの「意識的部分を無意識的部分との関係で理解した。」したがって、治療上、「無意識の意味を理解するために、自由連想、夢分析、遊戯療法などを用いた」こと。3、3人は、おのおの観点は異なっても、パーソナリティを発達史的に理解しようとしたことなどである。

また、3人の相違点は、まず、治療において無意識の意味を理解するために「フロイトは、抑圧された内容を重視し、クラインは、生まれた直後から活発にはたらく無意識的空想を重んじ、ユングは集合的無意識を主に探求した」ということがある。そして、ライフ・サイクルの中で、おのおの重視する段階をあげると、「フロイトは、エディプス期を、クラインは、生後の一年目を、そしてユングは人生の後半がもつ独自の課題を強調したのである。」

こうして、三者の理論をそれぞれ紹介した後、ユングがフロイトと訣別してから、フロイトは超自我概念をとり入れたり、クラインは、フロイトの考えをさらに発展させて、抑うつ態勢という概念をうちたてた。また、クラインがすでに提唱した妄想的分裂の態勢という考え方も、ユングの集合的無意識の考えにある元型という概念に近いものがある。そして、クラインの抑うつ態勢は、フロイトの愛の対象喪失の考え方を発展修正したものであるが、これは人格が統合される以前に、精神病的機制が支配する世界があるというところでユングが内界の探究をつづけてきたこととつながっている。そして、フロイトとユングは、結局このクラインの抑うつ態勢の概念でつながりをもつといい、ウイニコットのこぼを引用して、両者は互いに補完し合っていると述べている。

しかし、三者の考え方は、フロイトの幼児期におけるエディプス葛藤の重視、クラインの誕生直後からの対象関係の重要性、ユングの集合無意識や元型の概念化など、互いに隔たりをもちながら、かつ交流や接近をはかりながら発展していくであろうとみている。

本書の中で、もっとも魅力あふれる章をといえば、こ

のⅢであろう。「人格の成熟と変化」をとりあげるのに、執筆者はまず童話の世界を借りて導入をはかっている。しかし、この試みは単に童話の内容を、精神療法における人格の変容や成熟（それも治療者に向けての）という比喩に使うという効果以上のものを残している。宮沢賢治の「セロひきのゴーシュ」の物語は、見事にサイコセラピー心得のテキスト・ブックとなった。執筆者の筆の運びに引きずられて、この章ほど気持ちよく読み切ったこの種の論文を他に知らない。

童話のあとに登場するサイコセラピーの3症例（青年期2例、壮年期1例）も、執筆者の童話の比喩に自在に操られている格好になってしまっている。

さて、人格の成熟論であるが、ここでは、オルポートとユングが登場している。前者は、正常者やせいぜい神経症者を対象とする成熟の基準であるという意味で、人格の「明」あるいは「光」。後者は、それと対照的に、「暗」または「影」の部分にかかわるところである。本論では、むしろ、この『『暗』の部分、『影』の部分との関わりを全く無視』して、つまり「実はこれ抜きでは真の成熟などありえないのだが。」といわれるように、執筆者は、ユングの「肝腎なのは、反対物への転化ではないのだ。その反対物を承認しながら以前の諸価値を保持することなのである。」という言葉を通して、「人格の成熟の究極は人間一人一人が、その『個性化』をしていくことなのだ」といい、「サイコセラピーと呼ばれる営みも、まさにこの『個性化』への一つの道であると考えられるのである。」と述べている。そして、成熟のためには、「どうしても暗い影の部分を通り抜ける必要があるのだ」と結んでいる。

執筆者の才気煥発な文章が、むすびのことばの中にも満ちみちており、古句や短歌や数頁抄まで引用して、成熟についてのさわやかなエンディングとしているところは印象的である。

Ⅳは、パーソナリティにおける集団または個人差を述べながら、主として、特性論に目を向け、オルポート、ギルフォード、キャッテル、アイゼンクらの特性論を次々に紹介している。

これらは、類型論がヨーロッパ大陸において伝統的に発展してきたものであるのに対して、主として英米の研究者たちによって開発されてきたことが特徴である。

本章では、類型論（ヨーロッパ大陸）と特性論（英米）とを対比させながら、両者の立場の相違を明らかにしてきた。

執筆者が、特に披歴したかったことは、「パーソナリティの記述概念や測定方法が進歩したからといって、それ

が直ちに個人の特有なパーソナリティ構造の理解に結びつくとは言えない。」「個人の独自性の理解には理解しようとする人自身の独自性が必然的に介入してくるのである。対象となる個人と、理解する主体としての個人との二者関係の中において個人理解が成立するのである。」ということと、執筆者のふれることができなかった3つの重要な問題を提起している。

それは、(1) パーソナリティを規定する要因とは何か、いかなる要因によってパーソナリティの個人差が成立したのか。(2) 類型論や特性論には、未だパーソナリティ形成過程のメカニズムのような理解が生まれていない。

(3) 具体的場面における個人の行動予測である。

V 病気と人格——病前性格論を中心としては、まさに伝統的なヨーロッパの性格類型論である。ここでは、単なるステイテックな記述論に留まらず、近年、抬頭してきた、状況的要因を加味した類型把握が本章の特色となっている。

クレッチマーを中心とした病前性格論は、臨床精神科医としての執筆者の立場からは、「治療論の立場に立つかぎり、それは病者の生の宿命と発展を位置づけ人間存在としての「質」に近づくことであろう。そして機械的で硬化した単なる性格分類を越えるものでなくてはならない。われわれがその「質」を感得する時（人の肌あいにはやはり本質的には『感得』するものでであろう）、そこにおのずと病態理解と治療構造の設定への方法論が形を現してくるのではないと思われる。」ということになるのであろう。

Ⅵ は、人格の病いということで、執筆者に興味深い精神療法の4つの症例の紹介を通して人格の問題を問いかけている。

ジャック・ラカンの人格の3つの属性、統合性、指向性、責任性の構造理念を基礎において、「パンコフ夫人の症例を借り、その精神療法過程を通して、身体像の解離が、いかえると人格の解離が統合されゆく様態から、人格の病いを示してみたい」というのが執筆者の狙いである。中核性の精神病の2例では、「身体形態と内容の統合」が、辺縁性の精神病の2例では、「人間の生きてゆくもろもろの規範と身体像との統合」が、本論のテーマとなっている。そして、「人格の病いをみる時、私たちは逆に病いを通して、系統的なものでないにせよ人格理念および人格一般にふれざるを得ない。とくに人格の病いが病態から回復し、人格の再構成されてゆく過程から、ラカンのいう人間の共通体験としての人格をよみとってゆこうというのが、究極の私の意図である。」

というわけである。

Ⅶ ヒューマニスティック、サイコロジーは、人間性回復、自己実現の心理学、健康の心理学を目指して、1950年代に当時のアメリカ心理学の二大潮流であった、精神分析と行動主義心理学に対抗してあらわれた一連の運動である。これは、フロイトの精神分析にみられる「悲観的人間観」でもなければ、スキナーの行動主義が開発した「楽観的だが、操作的な人間観」でもない、まさに「人間の尊厳および人間の本質を肯定的に捉える」マズローやロジャーズに代表される、「心理治療やパーソナリティの研究と実践から」生みだされた新しい「人間観」なのである。

執筆者は、情熱を傾けてこのヒューマニスティック・サイコロジーの成果をデータをあげながら説き、人間は自由で責任ある存在であり、かつ価値、創造性、可能性、意志をもつと精神分析や行動主義との対比を通して力説する。また、この運動は燎原の火のごとく多方面に拡がり、発祥地アメリカでは人間関係から成立しているあらゆる領域に浸透するところとなった。このことは、エンカウンター・グループ運動の発展が大きく貢献した結果であるといえる。

こうして、ヒューマニスティック・サイコロジーは、精神分析や行動主義から、「現象的経験を心理学の重要な領域として扱わなかった」ことを批判し、「(1) 個人はすべて、自分が中心である、絶え間なく変化している経験の世界 (world of experience) に存在する。(2) 有機体は、場に対して、その場が経験され知覚されるままのものに反応する。この知覚の場は、個人にとって実在 (reality) なのである。」という命題を掲げている。しかし、ロジャーズは、行動主義と現象学との相補性を訴えており、ここでは執筆者も「ヒューマニスティック・サイコロジーの建設的基盤の一つとして、このロジャーズの認識論がもっとも納得のいくものであると思われる。」と述べて賛意を表わしている。

Ⅷ 人格における対極性の問題は、本書の終章を飾るにふさわしい魅力的な論文である。

執筆者は、わが国におけるユング心理学の第一人者であるだけに、本論の理論的構成がユングの思想—まさに人間の心の中に存する対極性の考え方を基礎にして展開されているところに特色がある。

最も興味深いのは、フロイト、アドラー、ユング、ホーナイ、オルポート、ロジャーズといった人々の人格理論の中にみられる対極性に関して、そこにそれぞれの次元や位相にちがいはあるにしてもなお、存在し得ることを明らかにしてみせてくれたところである。しかも、フ

ロイト、アドラー、ホーナイ、ロジャーズらに、各々みずからの理論の転回点が後年あるいは晩年に認められることを指摘した点であろう。

ここでいう対極性とは、たとえば、個人の人格の中に「概念的に矛盾する要素が共存、あるいは融合して存在する」ことを意味していたり、意識と無意識とにそれぞれ相反する傾向（たとえば向性）があって共存していたり、「一見両立し難いものが、両立することを前提として考えられる人格の要素がある」ということであったりする。そして、ロジャーズに関しては、クライアントに対して「建設的な人格変容が起こるため」の条件として、治療者が、時に、クライアントとの一致を要求されながら、それと逆のものを次元を異にしてみてもつこともあり得るという共存可能性を認めている点に、かれの理論の中の対極性を見出すわけである。この章の最後に、「質問紙による二面性の測定」という試みが紹介されている。これは、従来の質問紙法検査にみられる二者択一的な考えを捨てて、相反する性格特性の共存の度合いをそれぞれに測定しようとする新しい試みである。これによって、個人の人格に内在する対立した諸特性の共存性を証明しようとするものであり、執筆者の考える、人格論の対極性を裏づける方法として今後大いに期待がもてるテーマの一つであると思われる。

さて、パーソナリティに関する比較的最近の書として、代表的な以上の2冊を紹介してきたところで、かなり紙数をオーバーしてしまった。

実は、この他に、

駒崎勉著「新訂パーソナリティの心理学」(八千代出版 1984年 393頁)

中西信男「性格を知る」(有斐閣双書Gシリーズ 有斐閣 1985年 221頁) の2著書を取りあげる予定であった。筆者の計画性のなさから、ついはいみだしてしまい、本当に残念でならない。

著者に対しては大変に失礼ながら、ここは、この両書の感想を述べさせていただくことでお許しを願いたい。

まず、「新訂パーソナリティの心理学」については、本書は1977年、著者がものしたものを想を新たに書きかえた一冊である。

本書の構成は、心理学とは、という前提にはじまり、パーソナリティの総論、そして、パーソナリティの機能としての各心理的機能を取りあげ、パーソナリティの各論に入っていく。

全体に、その内容がきわめて広汎多岐にわたっており、著者の視野の広さと該博な知識に接することができる。パーソナリティに関する数多くの内外の書を踏まえ

て、この巨大な怪物パーソナリティをさまざまな角度から分析し、体系化をおこなっている。テキストとしての配慮もあってか、紹介や説明もきわめて平易で懇切丁寧であり、図や表、および写真や絵なども豊富に使われていて全体にかなり読み易いものとなっている。最近の類書の中では、きわめてまとまりのある入門書であるといえよう。

次に、「性格を知る」。著者は、パーソナリティの心理学の専門家として多年に亘り、実践と研究を積み重ねてきた有数の学者である。「あとがき」にもあるように、その豊かな知識や経験が、著者の過去の年代ごとに積み上げられ、そこに独自のパーソナリティ理論を生みだすにいたっている。

本書は、心理歴史論（サイコヒストリー）にはじまって、理想的人格とはなにかというテーマで終わっている。まさに、「はじめに」のことばにもある通り、「本書はこれまでの人格心理学の発展の歴史を回顧しながら少なくとも1980年代に妥当とされる人格理論であって、しかも21世紀にもなお生き残れるような人間の見方を示していきたいと思っている。」ことが、本書を通読してみると、よくわかる。

冒頭の部分で、著者の縦横無尽な斬りこみが、まず目を惹く。源頼朝にはじまる日本の征夷大將軍たちや、信長、秀吉、家康、さらには石田三成や戦国の各武將たちの分析がつぎつぎに俎上にのせられる。そして、特に徳川家康とヒトラーに関して、自己愛人格ないし自己愛人格障害と名付けたサイコヒストリカルな（あるいはパソグラフィカルな）診断による性格分析は、読者を引き

ずりこまずにはおかない筆さばきをみせてくれる。

著者は、本書を書くにあたって、「いつまでもクレッチマーではないだろうに。」という性格心理学に関する率直な感想を抱いているようだ。また、「反抗期」なる発達心理学上の定説にも、ある確信をもって反論している。この気概が、著者をして、性格の記述における陥穽を指摘させ、自己の「性格を知る」には、どんな手だてが必要か、現代のもっとも代表的なパーソナリティ諸理論を展開することによって訴えかけをおこなっているのである。

パーソナリティ（人格・性格）の心理学に関する、比較的最近の書4冊を以上あげてみたが、総括すると、まず、講座の中に組みこまれているはじめの方の2冊は、より学術論文的、専門的な傾向を色濃くもっている。これに対して、あとの2冊は、かなり啓蒙的であり、かつ個性的な豊かな発想によってまとめあげられている。

これら4冊のみで、今日のパーソナリティに関する心理学書全般をにわかに即断することはできないが、これらをまとめて将来を展望してみると、次のようなことがいえそうである。

即ち、自我心理学や自己心理学は、さらに発展し、深まりをみせていくであろう。一方、ヒューマニスティック・サイコロジーは、共感的対応を目指して実践の場を拡げていき、この人間の主体的な心を解明し、育てあげていくものと思われる。

パーソナリティの心理学こそ、21世紀へ向けての人間探求の心理学であるとの感を深めたことを、稿を終るにあたって一言添えておきたい。